

* 構文論と句読法——テンの打ち方私案——

山口佳也

一 はじめに

日本語においては、句読法が一般に確立していないと言われている。そこで、本稿では、句読点の打ち方のうち特に問題の多い読点（テン）の打ち方に絞って、筆者なりの考えを提出してみようと思う。

二 句読法の確立しない原因

日本語においてテンの打ち方がなかなか画一化しないということについては、色々のことが考えられる。まず、日本語で句読点がいられるようになったのは、漢文訓読の訓点や欧米の句読法の影響を受けた結果であると言われるように、もともと日本語に句読点を付す習慣がなかったことが挙げられる。また、日本語では、文の終わりが語形上弁別しやすく、そのため、歴史的に全体として句読法が重要視されなかったということも関係がありそうである。^①しかし、明治以後、教育面（文法面）、文芸面その他で、句読法に関する意見が様々提出されるようになったにもかかわらず、いまだに標準化が実現していないについては、更に別の原因を考えてみる必要がある。

る。

その一つとしてまず考えられることは、日本語のテンに何種類もの役割が負わされていることである。筆者は、英語のコンマの打ち方などから考えて、日本語でテンを打つ第一の目的も、やはり、文の構造や、文中の意味のまとまりを示すことによって、文の内容を把握しやすくすることであると考えている。ところが、日本語では、誤読を防ぐためとか、読みの間や息の継ぎ目を示すためとかいった、他のよんどころない目的でテンを打つことも多く（その箇所が、結果として第一の目的で打つ場合の箇所と重なる場合もあったりして、事態を微妙にしている）、肝腎の第一の目的がぼけてしまい、それが、第一の目的でどこに打つべきかの共通理解の確立を遅らせる一因になっていると思われる。

日本で句読点が社会的な広がりをもって普及し始めた明治期の作家たちの句読点（特にテン）の打ち方を見ると、文の構造というよりは、読みの間とか息継ぎの箇所とかいったものが強く意識されていた様子が観察される。^②谷崎潤一郎『文章読本』の説く句読法なども、その延長線上のものと云ってよいであろう。文学者でなくとも、現在、普段何気なくテンを打っている人の場合、意外とこれに近い意識の人が多いのではなからうか。^③

もう一つ、さらに根本的な原因として考えられることは、日本語

の文の構造そのものが複雑であることである。日本語の文では、かかり・受け、包み・包まれの関係が入り組んでいること、語順が比較的自由であることなどのために、文中の意味のまとまりをすっきりと示すことが意外と難しい。

例えば、「夕方になれば彼は帰ってくるだろう。」という文について考えてみる。色々な句読法案でよく見かける「主題の後に打つ」という規定に従って、「夕方になれば彼は、帰ってくるだろう。」としてみよう。しかし、これでは、「夕方になれば彼は」という妙な意味のまとまりを作ることになってしまう。一方、やはり種々の句読法案でよく見かける「条件を示す語句の後に付ける。」という規定に従って、「夕方になれば、彼は帰ってくるだろう。」としてみる。けれども、厳密に見れば、これも文中の意味のまとまりを正しく反映しているとは言えない。この文は、実際には、「彼は」〈夕方〉に「なれば」帰ってくる) だろう」のような意味構造をなし、意味的に、「夕方になれば」が「帰ってくる」にかかり、その全体が「だろう」に包まれ、かえって「彼は」は「だろう」に包まれない関係にあると見られるからである。この場合は、短い文であることもあり、いっそもも打たずに「夕方になれば彼は帰ってくるだろう。」としておく方が、意味のまとまりの上からは、かえって矛盾がなくてすっきりしていると言うこともできる。しかし、短い文でなかったらどうするのか。いずれにしろ、こういった微妙なテンの打ち方を定式化し、社会的に確立していくことは、たやすいことではないであろう。

我が国で発表されたほとんど最初のまとまった句読法案というべき、明治三十九年の文部大臣官房図書課「句読法案」は、国定教科書の文章（一部に文語体を含む）に関して、〈マル〉〈テン〉〈ボ

ツ〉〈カギ〉〈フタヘカギ〉などの施し方を規定したものであるが、テンについては、打つべき文中の箇所として、「独立ノ感歎詞及ビ呼掛ノ語ノ下但シ顛倒シテ置キタルトキハ其前後」「複文ノ副詞節ノ下」「他ノ語ヲ修飾スベキ副詞・副詞句ガ下ニ来ル語ヲ修飾スルガ如ク見ユル虞アルトキ其下」など、二十一項目を掲げている。当時としては詳細を極めたものといえるが、「緒言」に「則ルヘキ標準トナスヲ目的トシ」とあるように、形の上から一応のよりどころを示すにとどまるもので、しかも、系統的に文の構造を示すというよりは、読み取りにくいと思われる箇所、読み誤りの起こりそうな箇所に、個別に対応するといった趣が随所に感じられる。

最近の、日本語に関する事典、講座、教科書などで見かける句読法案のテンの打ち方も、これら従来の句読法の項目をいくらか整理し、さらに、数字の位取りのテン、強調のテン、息継ぎのテンなどを羅列的に加えてまとめたものが多い。一例として、『講座日本語と日本語教育 第8巻』の「符号の用い方」の「(2) 読点・テン」の項を掲げてみる（用例は省略する）。

読点の基本的な用法は、文中の語句の切れ続きを示すことである。文章を読みやすくするためや、文意を正しく伝えるために、読むときの息の切れ目や読みの間を示す役割を持つ。

1 ①文の中止につける。

②ただし、付属の関係にある文節間にはつけない。

2 副詞的語句の前後につける。ただし、この原則を忠実に守ると、切れ目が多すぎて文がなめらかでなくなる。そこで書き手の意図によって読点を省き、適当に整理して書くのが普通である。特に、文全体が短い場合や、副詞的語句のあとが短い場合には、読点を省略した方がよい。

- 3 文の初めに置く、①接続詞、②感嘆詞、③呼びかけ、④返事のことば、のあとにつける。
 - 4 条件や限定を表す語句のあとにつける。
 - 5 形容詞的語句が重なる場合、最後の語句以外の語句のあとにつける。
 - 6 他の語句を隔てて修飾する場合など、語句を続けて書くとき読み誤るおそれがある場合につける。
 - 7 読みの間を表すときに使う。
 - 8 話し言葉なら助詞を省くような場合、その省いた助詞に当たる位置につける。
 - 9 主語や主題を提示したときにつける。ただし、あとの部分が短い場合にはつけない。
 - 10 対等な関係にある語句や文を列記するときに使う。
 - ① 終止の形の文であっても、その文意が続く場合にはつける。ただし他の読点とのつりあい上、句点をつけることもある。
 - ② 多くの語句を列記する場合、それらがいくつかのグループにまとめられるときは同種類など小さい単位の方に「・」（なか点）を、種類別など大きい方の単位に読点を用いる。
 - 11 並列の「と」「も」を伴う語が重なるときには原則としてつけるが、必要がない限りは省略する。
 - 12 対話または引用文のかぎの前につける。
 - 13 倒置表現の場合に使う。
 - 14 ①漢数字の位取りに使う。横書きではコンマを用いる。
 - ② 「……年」というときにはつけない。
- これはあくまでも一例であるが、やはり、系統的に文の構造を示すという目的がはっきりと中心にすえられているようには見えない。

前文の「文中の語句の切れ続きを示す」という表現（この種のものとよく見かけられる言い方であるが）は、「読みの間を表す」「漢数字の位取りを示す」などの項目を含めた全体を大きく包む目的を示しているであろうが、いかにも漠然としている。

三 日本語の文の構造のとらえ方

以上から、日本語の句読法（特にテンの打ち方）に関しては、まず、文構造の上から重要な基本的なテンというものを押さえ、その後、他の理由で必要な諸テンを加えるといった形で、全体を組織し直していく必要があるように思われる。

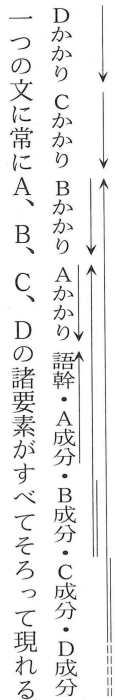
とはいえ、現在、日本語の文の構造のとらえ方に関して、定説があるわけではない。ここでは、かかり・受け、包み・包まれる関係や、従属節の種々相を考える上で手掛かりを得られそうな、南（一九七四）のいわゆる重層的な文構造論をよりどころとしていくことにしたい。

南は、まず、従属節を、内部に含み得る要素の違いによって、A類、B類、C類の三つに分類している。A類は、〈〜つつ（継続）〉、〈〜ながら（継続）〉、〈〜て（継起）〉、〈中止形（継起）〉の類で、内部に、かかり成分としては、〈名詞＋格助詞（主格を除く）〉、状態副詞、程度副詞など、述語成分としては、〈使役形、受身形〉などだけを含み得るものである（これらの成分もすべてA段階の要素と言える）。B類は、〈〜ので、〜のに、〜ば、〜ても〉の類で、内部に、かかり成分としては、Aの段階のかかり成分のほか、〈主格助詞、時の修飾語、場所の修飾語、ジツニ・トニカク・ヤハリの類、評価的意味の修飾語〉など、述語成分としては、Aの段階の述語成分の

ほか、〈丁寧の形、打消しの形、過去の形〉などを含み得るものである（新たに加わったこれらの成分もB段階の要素と言える）。他に、〈ながら（逆接）、つつ（逆接）、たら、と、ないで、ず、て（並列、理由）、中止形（並列、理由）など、B類の従属節と言えるものは多い。C類は、へから（理由）、が／けれど、し）の類で、内部に、A・Bの段階のかかり成分のほか、〈提示のことは、オソラク・タブン・マサカの類〉など、述語成分としては、A・Bの段階の述語成分のほか、〈意志形、推量形〉などを含み得るものである（新たに加わったこれらの成分もC段階の要素と言える）。他に、〈て（逆接）、中止形（逆接）〉などもC類の従属節と言える。なお、ほかに、従属節に一切含まれないものがある。かかり成分としては、〈呼び掛けのことは、文頭の接続詞、間投詞、挿入句〉など、述語成分としては、〈命令形、終助詞、間投詞〉などで、これらは、D段階の要素ということになる。

さらに、南は、以上のA、B、C、Dを、一つの文（述語文）の構造上の四つの段階と考え、すべての述語文はこれら四つの段階を経てできるとしている。それと呼応するように、文の述語的部分の構造は、（動詞＋）A、B、C、D各段階の諸要素の連続という形をとり、一方、かかり成分は、標準的な語順では、D、C、B、A各段階の諸要素の順で並んでいるという。

以上をもとに、文の基本的構造を、概念的に図式化するとすれば、次のようになると思われる。（例えば、「Aかかり」は「A段階かかり成分」、「A成分」は「A段階述語成分」の意）



とは限らない。活用語の連体形はB段階の述語成分、終止形はC段階の述語成分に相当すると考えられる。

この構造における各要素の、かかり・受け、包み・包まれるの関係は正確には不明というほかないが、筆者の独断で、予想される各要素のおおよそのかかり・受け、包み・包まれる関係を傍線で示しておいた。↓↑ はかかり・受けの関係、↕↗↘ は包み・包まれる（二重傍線の部分が他の部分を包む）の関係を表す。D段階の要素は、聞き手への働きかけの意味を表す要素ということになっているので、他の段階の要素とかがかり・受け、包み・包まれる関係を持たないと考えるのが自然だが、〈疑問の終助詞、禁止の終助詞、命令の形〉などは、包む働きを持つと考えざるをえない。ただ、

・今日は天気が悪いから、行事を中止しようか？
 ・今日は天気が悪いけど、行事を中止するな。
 などの例を見ると、C段階のかかり成分である「へから」「けど」は疑問ないしは禁止の範囲（スコープ）には入っていないところから、D段階の述語成分が他の要素を包む場合があるとしても、その範囲はC段階の述語成分の場合と同じと考えて、上のように傍線を施しておいた。

A段階の述語成分にA段階の接続助詞が付くなどして前方のひとまとまりの語句全体がかかり成分化したとき、A段階の従属節となる。同様に、B段階の述語成分にB段階の接続助詞が付くなどして全体がかかり成分化したとき、B段階の従属節に、C段階の述語成分にC段階の接続助詞が付くなどして全体がかかり成分化したとき、C段階の従属節になる。

ところで、従属節そのものもかかり成分と言えるが、南によれば、D段階の従属節は、一切他の従属節に含まれることはなく、C段階

の従属節は、C段階の従属節に時に含まれるが、B、A段階の従属節に含まれることはなく、B段階の従属節は、C段階の従属節には含まれる（B段階の従属節に時に含まれる）が、A段階の従属節に含まれることはなく、A段階の従属節は、C、B段階の従属節に含まれる（時にA段階の従属節に含まれる）とされる。

なお、連体修飾節中に含まれるのは、A、B段階の諸要素のみである。

以上を総合して見るに、D段階のかかり成分は、三上章が「やや遊離した位置にあり、主文へのかかり方が自由で、意味上誘導の役割をする」「ユウ式」の語句と呼んだものに相当し、文の要素の中で一番遊離度・独立度が高いと言える。次に遊離度・独立度が高いと見られるのはC段階のかかり成分（C段階の従属節を含む）で、時にC段階の述語成分に含まれることはあるが、多くの場合どの述語成分にも含まれることなく、遊離的である。B段階のかかり成分（B段階の従属節を含む）は、（B、）C、（D）段階の述語成分に含まれるほか、連体修飾節にも含まれる可能性があり、遊離度はそれほど高くない。A段階のかかり成分（A段階の従属節を含む）は、（A、）B、C、（D）段階の述語成分に幾重にも含まれるほか、連体修飾節にも含まれる可能性があり、遊離度は最も低い。

なお、南は触れていないが、かかり成分にプロミネンスが置かれると所属する段階が変わるということがあるようである。例えば、C段階のかかり成分である「くから、くが／けれど」などにプロミネンスが置かれると、連体修飾節にも収まるようになり、B段階のかかり成分に移行すると見られる。主題の「くは」がC段階のかかり成分であるのに、いわゆる対比強調の「くは」がB段階のかかり成分とされるのも、この現象の一環と言えよう。南理論には、その

他にも、細部に、修正を要する点、追補すべき点などがあると思われるが、ここでは、これ以上詳しく論じないこととする。

四 文の構造を示すためのテンの打ち方とは

筆者は、先に、文構造上重要な基本的なテン（文の構造や意味のまとまりを示すテン）をまず押さえ、次いで、他の理由で必要な諸テンを加えるという形で句読法をまとめるのがよいと述べた。日本語の場合、文の構造や意味のまとまりを示すテンとは、どのようなのだろうか。

筆者は次のように考えている。日本語の文の内部には、次元の異なる大・中・小の意味のまとまりがあり、それは、おおよそ南の言うD、C、B、A各段階の語句のまとまりに相当する。テンは、言うまでもなくかかり成分の後（時には前後）に打つわけであるが、文の構造や意味のまとまりを示す上での重要度は、高い方から、D、C、B、A各段階のかかり成分の後（時に前後）という順になると考えられる。D段階のかかり成分は、どの段階の述語要素にも包まれることなく、遊離度が最も高い。C段階のかかり成分は、時にC段階の従属節の一部になるほかは、半ば主文から独立しており、かなり遊離度が高いと言える。B段階のかかり成分は、多くは他の大きな意味のまとまりの内部のまとまりを示すものであり、その遊離度は小さくはないが限られたものである。A段階のかかり成分は、補足語、副詞に類する成分であり、遊離度は低い。

ただし、日本語の場合、テンは、相対的に増減可能なものであり、必ず打たなければならないという箇所があらかじめ決まっているわけでもない。そこで、句読法として、次のような条項を立ててみよう。

うと思う。

Iの1 単純な文で、特にテンを打つ必要がないと思う場合は、何も打たなくてもよい。ただし、〈応答詞、文頭の接続詞、感動詞、挿入句〉などD段階のかかり成分の後には、できるだけ常に打つようにする。

1 いいえ、私はこの魚をまだ食べたことはありません。

会話文などで、格助詞を省略して名詞を裸で使う場合、普通その後テンを打つということが行われているが、この名詞を、遊離語として、D段階化したものと見れば、それもうなずける。かかり成分の後に間投助詞のついた場合も同様である。

2 私、この魚、まだ食べたことがないわ。

Iの2 複雑な文で、テンを打つ必要があると思う場合は、(D段階のかかり成分は当然として) C段階のかかり成分から選んで、その後に打つ。その後、必要に応じてB段階のかかり成分から選んで、その後に打つ。

(C段階のかかり成分は、へ／＼から、／＼が／＼けれど、／＼し、／＼〈主題や提示のことば〉へタブン・オソラク・マサカの類／＼など。B段階のかかり成分は、C段階でもA段階でもないものと覚えておけばよい。A段階のものは少ない。)

3 彼は、絶対にそんなことをする人ではない。

4 いくら待ってもタクシーが来そうにないから、駅まで歩きましょうか。

息継ぎの箇所を意識するためか、強調の意識からか、よく、「彼は絶対に、そんなことをする人ではない。」のようなテンの打ち方をする人がいるが、C段階のかかり成分(彼は)よりもB段階のかかり成分を優先して打ってしまった例である。やはり右のように

打つのがよいと思われる。

「選んで」としたのは、例えば、C段階のかかり成分が同時にいくつか並んだ場合でも、あるC段階の成分が他のC段階の成分の一部になっている場合があり得るからである。「／＼から／＼けれど」「／＼けれど／＼から」「／＼から／＼し」などは、それぞれ「／＼から／＼けれど」「／＼けれど／＼から」「／＼から／＼し」のような意味構造となっていて、最後に一つテンを打てばよい場合が結構ある。

5 ついでだからかまきりを食ったことのない人に話しておくが、かまきりはあまりうまいものではない。(吾輩は猫である)

「／＼は／＼から」「／＼は／＼けれど」「／＼は／＼し」の場合も同様であるが、「／＼は」が後半部までかかるかどうかによって、その後にテンを打つかどうかが決まるようである。

6 日本語は、使っている人間は多いけれど、地域が東洋の一部に限られる。(人間は)は、対比強調で、B段階要素)

7 私はうっかりしていたけれど、その日は新聞の休刊日だった。(私はうっかりしていたけれど、その日は、新聞の休刊日だった。)

C段階のかかり成分が一つもないか、C段階の成分の後にひとわりテンを打った後、さらにテンを打つ必要があると思うときは、順序として、B段階のかかり成分から選んで打つことになる。

8 余りゲームをしすぎると目を悪くするので、注意する必要がある。(この場合、「／＼と」もB段階の成分だが、「／＼ので」の一部になるので、その後に打たない。)

この1の2があると、諸句読法案でよく見かける、「／＼から(C段階)」も「／＼ので(B段階)」も区別なく扱う「限定を加えて、条件を挙げる語句の後に打つ」のような項目や、「／＼は(主題、C段階)」も「／＼が(主格、B段階)」もこったに扱う「主語の後に打つ」

のような項目を設けなくて済む。

Iの3 あるかき成分の末尾だけでなく、先頭部も示す必要がある場合は、その成分の前後に打つ。

既に1の1で触れるべきであったが、文の途中に挿入されることの多い挿入句などは、テンを、当然、その後に打つだけでなく、その前（前接する語の後）にも打つ必要がある。

9 校長は、いつ帰ったか、姿が見えない。

挿入句以外のD段階の語句でも、語順が変則的な場合は、先頭部を示す必要がでてくる。

10 私は、しかし、そのようには思いません。

C段階ないしはB段階のかき成分についても、その前後にテンを打たないとおかしいまつまり具合の語句ができてしまう場合がある。これも、C段階のかき成分の前にB段階のかき成分が来るなど、語順が関係している場合が多いと思われる。

11 昨日僕は、仙台に出かけた。↓昨日、僕は、仙台に出かけた。

〔昨日僕は〕のままでは、妙なまつまり具合の語句になる。「僕は、昨日仙台に出かけた」であったとすれば、必ずしも「昨日」の後にテンを打つ必要はない。

B段階の要素であるにもかかわらず文頭で用いられることの多い、時や場所を表すかき成分は、上の例のように、結果としてその後にテンを打つ場合が多くなるが、かといって、理屈抜きでいつでもその後にテンを打てばよいというものでもないだろう。

Iの4 倒置文の場合、いわゆる正常な文の終わりに打つ。

12 大変だな、これは。

以上が、文の構造を示して内容を読み取りやすくするためのテンに関する項目である。

五 誤読を防ぐためのテンその他

後は、誤読を防ぐための応急手当的なテンと、読みの間や強調などを示すための剩余的なテンに関する項目を並べておけばよい。まず、前者から。

IIの1 あるかき成分が、すぐ下の語にかからずに、それを飛び越えてさらに下の語にかかる場合は、その後に打つ。

これには、連体的かき成分の場合と、連用的かき成分の場合とがある。

13 美しい、隣町の少女

14 彼は、笑いながら、いたずらをする弟を見ていた。

IIの2 対等の関係で並ぶ、語句と語句の間に打つ。

これには、名詞的な語句の場合と、そうでない場合とがある。

15 そこに、鈴木、小川、田中の三人が立っていた。（この場合、「鈴木」の先頭部を示す意味もあって、「そこに」の後もテンを打つ。）

16 私は、日本の首都、東京で生まれた。

17 とびは、高く、悠々と飛んだ。

いわゆる重文と言われるものの、節と節の間のテンも、これに準ずるものと考えることができる。

IIの3 会話文や引用文を用いる場合、次のようにする。

a 前かきに前接するかき成分（C↪Aの段階にかかわらず）の後に打つ。

18 彼は、空を見て、「あっ。」と言った。

b 後かきの後の「と」が直接述語に続く場合は、打たない。

しかし、何らかの成分が介在する場合は、「と」の後に打つ。
19 彼は、「大丈夫だよ。」と言った。／彼は、「大丈夫だよ。」と、大きな声で言った。

c かぎを用いないときは、「と」の前又は前後に打つ。

20 早く晴ればいいのにな、と思った。／早く晴ればいいのにな、と、思った。

IIの4 語の区切れ、漢数字の位取りなどを示す必要のあるとき、打つ。

21 普通、切符はいらない。「普通切符」と読まれるのを防ぐ。

22 彼と、私の両親（「彼の両親」と「私の両親」の意味に取られるのを防ぐ。）

23 そこには、人が十二、三人いた。

24 一、三、五二（縦書きの場合）

次は、剩余的なテンに関するもの。

IIIの1 息継ぎや読みの間を示すために打つ。

IIIの2 強調を示すために打つ。

25 これは、彼の、作品です。

ただ、IIIの1、2によるテンは、論理的要求と関係なく、文中のあらゆる意味的区切れ目で用いられ得るものであるから、これを多用すると、せっかくIとIIに基づいて筋道立てて打ってきたテンの意味が無化してしまうおそれがある。理論的な文章では、乱用しない態度が必要であろう。

六 おわりに

日本語の文で用いるテンについて考える場合、いろいろの意味あ

いのテンがあるということを経ずはつきりと認識することが大切であろう。その上で、それらを等し並みに扱うのではなく、文の基本的な構造を示すテンを中でも最も重視する姿勢が必要である。

その意味から、本稿では、テンの打ち方について、文の基本的な構造を示して文の内容を把握しやすくするテン（Iの系列）を基本にすえ、それに、誤読を防ぐための応急手当的なテン（IIの系列）、読みの間などを示す剩余的なテン（IIIの系列）を加える形でまとめた。

日本語では、IIIの系列のようなテンがある以上、どんな人にも誤りなく画一的なテンの打ち方をさせる句読法など始めから望むべくもないと言わなければならない。しかし、IとIIの系列のテンに限って、その使い方を粘り強く議論していくなら、広く一定の共通理解に達することもあながち不可能ではないのではなからうか。あえてここに拙い案を示してみたのも、そのたたき台になればと思ったからにはかならない。

分量の関係で、用例は最小限に限らざるを得なかった。拙案による更に具体的なテンの使用例を見ていただくことについては、別の機会に譲りたいと思う。

注

- (1) 斎賀（一九五八）など。
- (2) 杉本（一九六七）など。
- (3) 以前、筆者がある研究会で句読法について発表をした際、数人の参加者から、自分だったらそんなところに絶対にテンを打たないと猛反発を受けたことがあった。今考えてみるに、その

人たちは、テンを打つ所はすべて読むとき息を継がなければならぬ所と考えている人たちだったのではないかと思う。

- (4) もちろん、「夕方になれば、彼は、帰ってくるだろう。」のような打ち方も考えられる（本稿の案のⅠの3による場合）。これではテンが多すぎて煩瑣だと考えて、便宜的だが、「夕方になれば、彼は帰ってくるだろう。」を許容する考え方もあり得る。しかし、残念ながら、本稿の案ではこれを許容する条項が欠けている。

(5) 稲垣（一九八九）。

(6) 三上（一九五三）。

- (7) 拙稿、「くから」と「くので」のかかり先について（『国文学研究』77 一九八一）、「断定表現2—ノダ文—」（『日本語表現・文型事典』朝倉書店 二〇〇二）など参照。
- (8) 尾上圭介「南モデルの内部構造」（『言語』28巻11号 一九九九）など。

〈参考文献〉

- 稲垣滋子（一九八九）『符号の用い方』『講座日本語と日本語教育第8巻 日本語の文字・表記（上）』（明治書院）
- 大出晃（一九六五）『日本語の論理』（講談社）
- 桑門俊成（一九六五）『句読法・諸符号の文法』『日本文法講座5 表現と文法』（明治書院）
- 斎賀秀夫（一九五八）『句読法』『続日本文法講座2 表現編』（明治書院）
- 杉本つとむ（一九六七）『句読点・記号の用法と近代文学』（国文学

研究』第三五集（早稲田大学国文学会）

杉本つとむ（一九九八）『杉本つとむ著作選集5 日本文学史の研究』（八坂書房）

総理庁・文部省（一九四九）『くぎり符号の用い方』『公文用語の手びき（改訂版）』（印刷局）

武部良明（一九八二）『読点（とうてん）』『日本語教育事典』（大修館書店）

谷崎潤一郎（一九三四）『文章読本』（中央公論社）

永野賢（一九五七）『句とう点のうち方』『言語生活』昭和三十三年三月号

中村明（一九九五）『悪文』（筑摩書房）

芳賀綏（一九六二）『国語表現教室』（東京堂）

服部嘉香（一九三三）『現代作文新講』（早稲田大学出版部）

本多勝一（一九七六）『日本語の作文技術』（朝日新聞社）

松村明（一九七五）『国語表現論』（桜楓社）

三上章（一九五三）『現代語法序説』（刀江書院）

南不二男（一九七四）『現代日本語の構造』（大修館書店）

文部省国語調査室（一九四六）『くぎり符号の使ひ方（句読法（案）文部省国語課（一九五〇）「くぎり符号の使ひ方」』文部省刊行物表記の基準』

文部大臣官房図書課（一九〇六）『句読法案』（吉田澄夫・井之口有

一『明治以降国字問題諸案集成』風間書房 昭和37 所収）

鶴岡昭夫（一九八八）『句読点』『日本語百科大事典』（大修館書店）

*Syntax and Punctuation Method — A Plan of Usage of Comma in Japanese —
**Yoshiya Yamaguchi (Japanese Language and Literature)
キーワード 句読法 読点 テンの打ち方